

P-112 腹腔鏡下子宮外妊娠手術の術後成績と術式選択に関する考察

藤田保健衛生大

塚田和彦, 廣田 穰, 吉田麻里子, 大原 聡, 中村あずみ, 安江由起, 多田 伸, 宇田川康博

【目的】当教室における腹腔鏡下子宮外妊娠手術症例の手術成績を検討し、腹腔鏡による子宮外妊娠手術の術式選択とその問題点について考察した。

【方法】1994.1~2001.9までに腹腔鏡下子宮外妊娠手術を実施した卵管妊娠64例—卵管切除術29例(切除群), 卵管線状切開術27例(切開群), 血腫除去術8例(除去群)を対象とした。また、腹腔鏡下卵管保存手術の適応は、1. 挙児希望があること、2. 未破裂卵管であること、3. 卵管周囲に強固な癒着を認めないこと、4. 卵管采を含み4cm以上の健常卵管を温存可能であること、5. 術前の超音波断層検査で胎児心拍動を認めないこととした。

【成績】術後子宮卵管造影で患側卵管の疎通性が確認できた症例は、切開群55.6%(10/18), 除去群100%(3/3)であった。また術後のフォローアップが可能であった症例の子宮内妊娠率は、切開群57.1%(8/14), 切開群64.7%(11/17), 除去群50.0%(3/6)であった。また術後の同側反復子宮外妊娠は、共に卵管采癒着を認めた卵管膨大部妊娠例(切開群)と術前に胎児心拍動を認めた卵管采妊娠例(除去群)の2例にみられた。今回の検討では、絨毛遺残に起因するPEP症例は認めなかった。

【結論】当教室での腹腔鏡下子宮外妊娠手術の術後成績は諸家の報告と同等ないしはそれ以上であり、当教室での腹腔鏡下子宮外妊娠手術の適応基準設定と術式選択の妥当性を示すものと思われた。また、卵管保存術後の同側反復子宮外妊娠症例はいずれも卵管采に癒着を認めた症例であり、このような症例に対しては卵管切除術を選択すべきと考えられた。

P-113 子宮腺筋症, 子宮内膜症, および正常子宮内膜におけるヘパラーゼ発現の意義

京都大

鶴田優子, 刈谷方俊, 南部香成子, 万代昌紀, 草刈孝史, 折井文香, 東辻久子, 小西光長, 八木治彦, 北 正人, 高倉賢二, 藤井信吾

【目的】子宮腺筋症の発症機序としては子宮内膜基底層の筋層内への直接浸潤であるという仮説が優勢であるが、その浸潤機序については明らかでない。ヘパラーゼは、細胞外基質や基底膜に存在するヘパラン硫酸プロテオグリカンの特異的に分解する酵素であり、多様なシグナル伝達の修飾作用を有し、悪性腫瘍ではその浸潤への関与が報告されている。そこで子宮腺筋症におけるヘパラーゼ発現を調べ、正常子宮内膜, 子宮内膜症での発現との比較からその意義を検討した。

【方法】同意を得て手術時に採取した子宮腺筋症12例, 卵巣子宮内膜症26例, 直腸深部子宮内膜症2例, 正所性子宮内膜21例(増殖期11例, 分泌期10例)のパラフィン包埋切片を用い、免疫組織化学的にヘパラーゼ発現を検討した。

【成績】子宮腺筋症病巣では12例中10例で腺細胞におけるヘパラーゼ発現が強陽性であるのに対し、卵巣子宮内膜症では26例中24例が陰性であった。直腸深部浸潤性子宮内膜症では2例中2例で病巣の腺細胞が強陽性であった。いずれにおいても、異所性内膜間質細胞においては陰性であった。正所性子宮内膜では増殖期基底層の腺細胞と、機能層の間質細胞においてヘパラーゼ発現を認めた。

【結論】子宮腺筋症病巣の腺細胞でヘパラーゼが高発現していたことから、その多彩な活性が子宮内膜基底層に浸潤性格をもたらし子宮腺筋症の形成に寄与している可能性が示唆された。また子宮内膜症組織では表層病巣では殆ど陰性であったのに対し、直腸深部内膜症で発現亢進が認められたことから、子宮内膜症の中でも浸潤性格を有する直腸深部内膜症の病態にヘパラーゼが関与する可能性が示唆された。

P-114 子宮内膜症細胞におけるIL-8産生とステロイドホルモンによる制御

鳥取大

坂本靖子, 堀江さや子, 井庭裕美子, 谷口文紀, 吉田壮一, 岩部富夫, 原田 省, 寺川直樹

【目的】Tumor necrosis factor α (TNF α) は Interleukin-8 (IL-8) の産生を誘導することによって子宮内膜症細胞の増殖を促進することを報告した。TNF α は転写因子 NF κ B を活性化することが知られている。本研究では、子宮内膜症細胞のIL-8産生におよぼすステロイドホルモンの影響とNF κ Bの関与について検討した。

【方法】患者6例の同意のもと、手術時に採取した卵巣チョコレート嚢胞壁から内膜症間質細胞を分離培養した。TNF α (0-10ng/ml) の単独添加, あるいはTNF α (100 pg/ml) の存在下にE2, P4またはデキサメサゾン (DEX) を添加し, 24時間培養した。間質細胞上清中のIL-8濃度をELISAで測定し, 間質細胞のリン酸化I κ BをWestern blottingにて検索した。

【成績】TNF α の添加は, 間質細胞上清中のIL-8産生を濃度および時間依存性に増加させた。TNF α 存在下でのIL-8産生は, E2およびP4の添加により166%および187%へと増加した。一方, DEX添加によりIL-8産生は39%に抑制された。TNF α の添加により間質細胞のリン酸化I κ Bは207%に増加した。リン酸化I κ Bの発現はE2およびP4の添加でさらに促進され, DEXの添加により抑制された。

【結論】子宮内膜症間質細胞において, TNF α はNF κ Bを活性化することによりIL-8産生を促すことが明らかとなった。ステロイドホルモンはNF κ Bの活性化を介してIL-8の産生を制御し, 子宮内膜症細胞の増殖に関与する可能性が示唆された。